

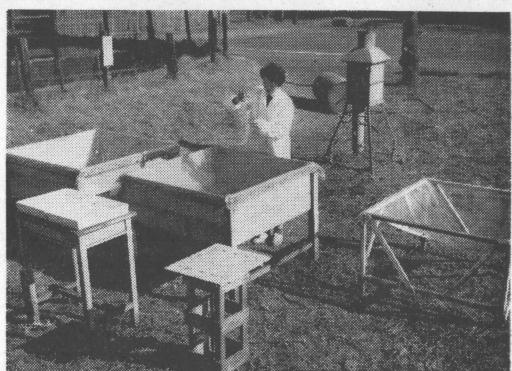
放射能雨試料の採取

つい先だって場末の映画館に入ったら、 “世界は恐怖する” という文化映画がかかっていた、その中で何年前の当研究部がでてきた。あれは確か亀井文夫監督が数年前に当所に来て撮ったものである。あの映画にててくる研究室の設備は、現在に比べると、かなり貧弱であった。それでも 8 年前に比べると、まだましである。8 年前、つまり 1954 年 5 月の俊鶴丸によるビキニ・エニウェトク海洋調査に、当研究部の放射能研究は端を発する。当時は測器と云えば、自製の 2 進式ガイガーカウンターと水産庁から借りた G・M カウンターと 32 進のスケーラーが一対あったきりです。当時は、俊鶴丸調査をビワ湖に落としたインク一滴を探すようなものと考えた学者もいたくらい、人工放射能汚染に関する人々の知識は不十分なものであったがどだい研究施設が貧弱だった

ので、これもやむをいないことであった。それでも、その貧弱な設備を用いてなされた研究値等はしだいに世の中の信用を得て、少しづつ高性能の測器が整備され、現在では、写真のような低バックグラウンド・G・M ガスフローカウンターをはじめ、ガンマ線シングルチャネル・スペクトロメーター、気体用低バックグラウンド・プロポーショナルカウンターなどが完備された。また、近いうちに、256 チャネル・ガンマ線スペクトロメーター、フリッシャグリット・アルファ線スペクトロメータが新たに追加されることになっている。これらの測器により、当研究部の仕事は今後ますます精密さを加えるとともに、より多数の試料がこなせると信じている。

放射性フォールアウトの研究そのものは、ずいぶん地味なものである。長期間にわたる辛抱強さが要請される。1958 年の末から 61 年の夏までの核実験の停止とともに、人々の関心は漸やくこの問題から離れようとした。当研究部はそういう秋風の中でも前々からのベースをくずさずにやってきたし、また研究の必要性を力説してきた。それにも拘らず、その筋では、研究調査の縮少をほのめかした。その矢先、ソ連の 50 メガトンが爆発した。世情は一変した。そして、当研究部の不断の努力が物を云う時期がやってきた。

(杉浦吉雄記)



低バックグラウンド・ガスフローカウンター・ストロンチウム-90 のベータ線強度を測定するところ